

茨木診療所 安達克郎所長が 大阪社会保障推進協議会 会長に就任しました！

(毎月5、15、25日発行)

大阪保険医新聞

(1963年7月9日第三種郵便物認可)

第2039号

たたかいはローカルからオール大阪、
オールジャパンへ!!



大阪社会保障推進協議会

大阪社保協新会長に交代へ

「結成から30年」節目の第31回総会が開催

1990年12月に再建されて30年を迎えた大阪社会保障推進協議会(大阪社保協)は3月13日に、第31回総会を開催しました。

今回は新型コロナウイルス感染症対策のためにオンラインでの開催になり、全体で47人が参加し、各地・各団体より活動報告がされたのち、新年度方針を確認しました。

今総会では再建当時から大阪社保協に関わってきた井上賢二会長が退任し、新たに安達克郎氏(大阪民主医療機関連合会・茨木診療所長)が会長に就任しました。新会長の安達氏と、退任される井上氏からのあいさつを紹介いたします。

いのちと暮らしを守る役割

新会長・就任あいさつ
茨木診療所 所長 安達 克郎



私は1983年に大阪大学医学部を卒業後、堺市にある耳原総合病院小児科で2年間の初期研修後、1985年から大阪市にある西淀病院小児科に23年間勤務し、2008年に内科・小児科・アレルギー科標榜の茨木診療所に所長として赴任し13年目になります。

茨木診療所は、外来診療、訪問診療、健診の医療活動に加え、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所の2つの介護事業を行っています。私は、茨木市の介護認定審査委員会、地域ケア会議の医師会委員、また保育園の理事長および6カ所の保育園の嘱託医、2カ所の学校医、きょうふれん所属の作業所の嘱託医と、医療・介護、保育、教育、障害分野の現場で働いていることにお役に立っていることとお受けしました。2020年は新型コロナウイルス感染症の大流行により、これまでになく様々な困難にぶつかった年でした。これまでの政府の低医療費政策で公的病院や保健所が削減されてきたことで大きなパンニックに陥りました。特に第3波が猛威をふるう中、新型コロナ患者が入院できずに自宅に帰るなどの報道が相次ぎました。

これらの事態から私たちは、医療や介護が国や自治体の政策によって大きく影響を受けること、いのちや人権を守るためには政治の在り方こそ問われるということを学んだのではないのでしょうか。

大阪社保協は、これまで住民のいのちと暮らしを守る運動の要となる重要な役割を果たしてきました。その活動がさらに発展するよう責務を果たしていく所存です。どうぞよろしくお願いたします。

より良い社会を目指して

前会長・退任あいさつ
保険医協会 副理事長 井上 賢二



私は医師として53年間働いてきました。卒業してすぐに耳原病院に行き、3年間の研修を積んだ後に、西淀病院と姫島診療所で勤務しました。現在も姫島診療所で働いています。

診療所の中で感じることは、患者の8割くらいは70歳以上の高齢者だということです。30年から40年間診ている方もたくさんいます。現在、こうした高齢者の多くはコロナが怖いため外出を控え、自宅に引きこもりになっています。食事はコンビニで購入し、1日に1食分を2回に分けて食べている人もいらっしゃいます。診療所に来る回数も2〜3カ月に1回と減らす方が少なくありません。患者さんが外出を減らすことで体調の悪化や足腰が弱くなっていることを懸念しています。

誰もが人間らしく生きられる社会に

大阪社保協は当時の大阪府保険医協会理事長の平井正也先生が呼びかけ人となり結成されました。現在では27の団体と労働組合、52の地域社保協となり、全国一の規模まで発展しています。

今回の総会で私は会長を降りますが、事務局長の寺内さんをはじめとする多くの皆さんに支えられ、ここまでやってこれたことに感謝申し上げます。

地域にはまだまだ生活や暮らしに困っている人が沢山います。その人々に手を差し伸べられるように、地域社保協の活動を活発にしていきたいです。それと同時に、根本である国の政治や大阪の政治を変えていきたいと思います。そして誰もが「人間らしく生きられる」社会を目指して頑張っていきたいと思います。

